

ギャロン(かつてギャルモロン=女王谷と呼ばれた)は一般の人にはほとんど知られていませんが、チベット文化を研究する専門家の間では強い興味を持たれていて、最近、ギャロン語の辞書が日本の国立民族学博物館の研究成果資料として発行されました注)。写真①②はこの辞書の表紙と内容の例です。これは四姑娘山や丹巴の一部等で最も広く話されているツァンラ方言のみの辞書ですが、「ギャロン語(ギャロン文字は無いのでラサ語の文字で表記)―中国語―ラサ語―英語」が併記されていて、A4版で厚さが4cm近くある本格的な辞書です。女王谷の言葉についてこれまで断片的にご紹介した事が有りますが、この機会にもう少し補足してご紹介します。

今では「ギャロン/rGyalrong」(中国語では「ジャーロン/Jiarong」)と呼ばれるこの地は、元々「ギャルモロン/rGyalmorong」と呼ばれ唐書には「東女国」として記録されています。「ギャルモロン」の地名とその意味「女王谷」はこの地の知識人の一部に今も継承されていますが一般の人には忘れ去られ、今では「ギャルモロン」から「ギャロン」即ち「女王の谷」から「王の谷」へ変わっています。

しかし信仰の中心として古代から広く崇められ今も伝えられているモルド山(写真③)の本来の名称「ギャルモ・モルド/rGyalmo-murdo=女王の尖った岩」には「女王」の語が残り、知識人の一部だけでなく一般人の一部にも継承されています。

「ギャルモロン」が「ギャロン」に変わっていった時期は、18世紀中期に清朝の乾隆帝がこの地に進攻して覇権を確立した金川戦役以降のようで、女性の家督相続を公には認めなくなった事が契機だとする説が有ります。

ギャロンの地にはおおまかに言って互いにほとんど通じない3つの方言が有り、今日では多数派の方言を話す人達が自らをギャロンと称しています。

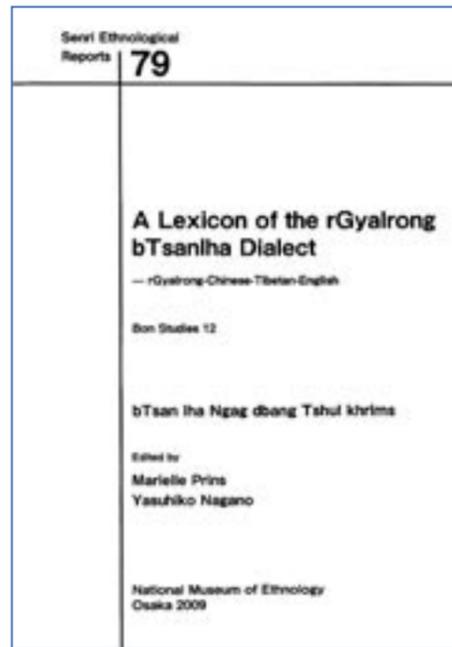
この多数派(写真④)の方言が初めてご紹介したツァンラ方言です。多数派で且つ名称がギャロンなので、これらの人々が唐書などに記録された東女国の文化を特徴づける直系部族のように思いがちですが、色々な時代に色々な部族が移動した事による言語と文化への



写真③ モルド山



写真④ ツァンラ地方の婚礼の宴席



写真①② ギャロン語(ツァンラ方言)の辞書の表紙(左)とその内容(右)、

影響は複雑で、短絡的にそうとは言えません。

東女国を特徴づける政治形態や建築物はチベットの吐蕃王朝以前に広大な地域で長く栄えたシャンシュンからの移民がボン教と共にもたらしたのですが、このシャンシュンの言葉(ギャロンと同じくほとんど文字がありません)をもっとも残しているのは2番目に多く話されている丹巴中西部のゲシザ方言だとする説があります。またゲシザ南部にはギャロンで最も古い歴史(シャンシュンからの移民の頃)を持つと考えられるボン教の寺が残っていてこの説に符合しています。しかしこの地方は13世紀のモンゴルの進攻によって滅びた西夏からの移民が有ったとされる地域と重なるため西夏の影響の方に注意が集まりがちで、それ以前の古代文化には目が向かない傾向があります。

3番目の方言は丹巴中南部のソボ等で話されているもので、ラサの言葉に近いと言われていています。この周辺地域に住む人達は主に1000年位前に移民して来たとする言い伝えが残っていますが、その経路についてはハッキリしません。ただ大渡河源流部に位置するこの地域はモルド山の本来の名称「ギャルモ・モルド」が一般の人にも残っており且つ数多くの高い石積みの塔が残る特異な場所(写真⑤)でもあります。さらにこの地域の集落から離れた標高の高い所には特に立派な塔や要塞の跡が残り、東女国の遺跡だと信じている地元の人も居ます。

注) 今回の話しに少し関連しますが、今年の春から夏に掛けて東京と大阪でチベット文化を紹介する展示会や講演会が幾つも開かれます。その中で国立民族学博物館が1990年代後半からフランス・中国と共同調査したギャロンに関係深いボン教の研究成果も紹介されます。機会がございましたら是非ご覧になって下さい。

国立民族学博物館の本稿関連ホームページは下記です  
(<http://www.minpaku.ac.jp/museum/exhibition/tibet/>)



写真⑤ 高い石積みの塔(古石碕)が残る特異な場所